



たんけん隊

舟入川



藩政時代の初期、野中兼山は土佐山田町神母ノ木に山田堰をつくり、幅およそ6m~8m、深さおよそ1.5m、長さ10.5

kmほどの用水路を浦戸湾にみちびきました。舟入川の名は二代藩主忠義が川狩りのため井口まで舟を入れたためにつけられたと伝えられています。

舟入川はたんに高知平野をうるおすだけでなく、水上交通路として、香北と高知市を結ぶ重要な役割を果たしました。周辺は盛んに開墾が

行われて農地が増加し、その中心に諸税御免の後免町ができ、水上交通の中心として町が栄えました。

道路が作られていない、昔は、駄賃馬では大量の輸送はむずかしく、物部川から舟入川を下る舟便を利用する外はありませんでした。十石船などが、物部川のおく地でつくられた米、木炭、紙、茶、ときには、便乗する人などをのせ、舟入川を下り、高知の城下で荷をおろした船は日用品などの荷を積み、川をさかのぼりました。

また、この舟入川を材木を組んだ筏もさかんに下り、後免や大津には船頭のたまりや宿屋もたくさんできました。

今日では、河川改修が進み、後免町を中心としたザ・ごめんパワーアップシティ地区整備計画では、水辺の空間を生かした「親水公園」として、整備が進められます。

部落の実態と今後の課題①

同和地区の人々のねばり強い闘いによって「同和对策事業特別措置法」が成立してから二十五年がたちました。その間、部落差別をなくするために、さまざまな事業や取り組みがなされてきました。

南国市でも、一九八二（昭和五七）年から小集落地区改良事業が本格的にスタートし、差別の結果劣悪であった環境を改善するため、道路や住宅用地・公園の整備、改良住宅の建設など大規模な事業が行われてきました。

また、学校での同和教育や地域社会での同和教育も積極的に行われるようになりました。南国市内の小、中、高等学校では、教育活動の中で同和教育が取り組まれていました。全市民向けには、「同和教育推進講座」なども活発に行われています。

その結果、生活環境は大幅に改善され、同和問題への正しい知識や理解を持つ人びとも増えてきました。

いま部落は、そして……。

しかし、一方では、「同和問題はほとんど解決した」

「同和地区ばかり良くなって三」「もうそろそろやらなくてもいいのでは」という声も出ていますが、本当に解決したのでしょうか。

同対策答申で「同和問題解決のための根本的課題」といわれた就職の機会均等、つまり仕事の問題はどうでしょうか。

同和教育シリーズ

仕事をするうえで欠くことのできない教育の問題はどうでしょうか。

結婚をはじめとする差別意識の問題はどうでしょうか。



小国地区改良事業前